

漢字を考える

著者	京極 興一
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 1: 25 (1980)
発行年月日	1980-09-20
URL	http://hdl.handle.net/10091/00022347

随想

漢字を考へる

京 極 興 一

一昨年九月の稻荷山古墳出土鉄剣の銘文、昨年一月の太安萬侶墓誌などの相次ぐ発見には少なからず興奮させられた。一方、現在と将来にかかわることとしては、昨年三月の常用漢字表の中間答申と、おそらくは今年最終答申、内閣告示という一連の動きが注目される。それは、昭和二十一年十一月以後の、国語表記の最も基本的な骨格が修正されることになるからである。

私は、国語国字問題振子論と勝手に名づけているのであるが、幕末以降百余年の歴史は、例えば、漢字廃止―制限―自由、かなづかいの表音的―折衷的―歴史的のように、大筋において両極の間を右に左に揺れてきた。昭和四十年代からの修正路線もその一つの動きに過ぎないと見る。振幅は次第に小さくなっているとも考えられようが、根本的な問題解決、または国民的合意には程遠い状態にあるといつてよい。

それにしても、日本の語彙における漢語の重み、表記における漢字の重みをつくづく感ぜずにはいられない。その重みに対する尊敬

依存の感情と反撥の感情こそ振子の動力と思うからである。更に、かくも日本語の中に食いこんだ漢語・漢字、それにもかかわらず、それに支えられた日本人の思想・文化の根無し草的側面は一体何なのだろうと、いいしれぬ不安を感じる。このあたりのことをまず明らかにすることが、国語国字問題の原点なのではなからうか。

ところで、日本語のこのような問題について、初めて問題提起したのは、太安萬侶であった。「……已に訓に因りて述べたるは詞心に逮ばず、全く音を以ちて連ねたるは事の趣更に長し……」という「古事記」の序のことには、既に日本語の未来を示唆するものがある。私は墓誌の写眞の鮮明な文字を見ながら、日本語と漢字の間に立って苦悩する安萬侶像を、身辺になつかしく想い画いたことであつた。

※ 本稿は、昭和五十五年一月十日
発行の「会報第2号」のために、
ご寄稿いただいたものです。